

牧師所感： 主イエスの十字架の苦しみと復活

筆者が神学校（東神大）を卒業して牧師となり、牧会を始めて早や 50 年が経過した。70 歳の牧師定年により、2003 年に引退（在日大韓基督教団）する一年前から開拓伝道を始めて 22 年が経過した。開拓した教会は千葉県 八街市 勢田 828-2 番地である。ところで筆者は今年の 3 月で、91 歳の誕生日を迎えた身分になった。

さて 筆者は長い間 牧師在任中、キリストの復活、クリスマスの聖日の行事を幾度となくお祝いして来た。だが 今年の復活の聖日は、今まで 牧師（私）個人の牧会に経験をしたことのない特別な意義ある復活聖日として迎えることとなった。

その訳は最近、キリストの復活に関するテキスト『わが神、わが神 受難と復活の説教』加藤 常明 編を再読することにより、今まで気付かなかった 聖書の御言葉を再認識することになった所以である。

テキスト 119 頁 受難週とイースター 北森 嘉蔵

コリントの信徒への手紙 I 1:18~25

さて 筆者は 北森教授の復活に関するテキストの解釈をここに示して、筆者の今までの解釈の不完全を是正したいと思うのであります。

パウロのことば

「まずお話しします。去年よりも、イースターのとらえ方が少しでも深まったのは、きょう取り上げました、『コリント人への第一の手紙』の一章の十八節によってでございました。『十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちは、神の力である』続けて読みますと、『十字架の言葉は神の力である』ということになります。

皆さんは、何気なくこの言葉をお読みになっているのではないかと思いますが、ちょっと考えるとこの言葉は不思議な、理屈に合わないような筋で書かれている、と思う方もいるのではないでしょうか。皆さんがお書きになるとすれば、『復活の言葉は 神の力である』と、書きたいと思うでしょう。まことにキリストの復活は、神の力が、キリストの力が、勝利となって現れた出来事でございまして、神の力ということを 今ここで讃美いたします。十字架の言葉と言わないで、よみがえりの言葉は、神の力である、と言いそうなものですけれども、パウロはそうは言わないので。十字架の言葉が、神の力である、とはつきりと書いているのでございます。」

以上北森先生は、勿論 復活は神の力のあらわれですが、『十字架のことばが神の力』だとおっしゃるので。復活の言葉が 神の力とおっしゃっていないのです。十字架の言葉は 神の力であって、けれどもではなくて、したがって 復活は 神の力だとおっしゃいます。復活と十字架の言葉が二重の意味で神の力です。聖書を良く読んで正しく解釈したいのです。主イエス・キリストの御復活、ハレルヤ！ アーメン